

吉見俊哉編

## 『戦争の表象』 東京大学出版会、2006年

1921（大正10）年に朝日新聞社の編集・発行による『大戦ポスター集』（以下『大戦』）という図録が公刊された。

朝日新聞社は、第一次大戦の主要交戦国の戦時ポスターを約6000点収集し、大阪・東京を皮切りに日本・中国・朝鮮など計31箇所で開催してあり（田島奈都子「近代日本における広告の啓蒙普及機関としての商品陳列所」『メディア史研究』21、2006年）、この『大戦』には170点の図版が採録されている。その巻頭に曰く「ポスター図版一百七十種、英仏各二図、米独各三図合計十種を三色版とし、自余の一百六十種はこれをフォトグラビヤ版に上せたり。フォトグラビヤ版を輪転印刷により新聞附録とせるは大阪朝日新聞を以て我邦の嚆矢とし、更にこれを平板印刷に附して書籍として公刊するはこれまた日本に於て前例なき所なり。この意味に於て本書は我が出版界竝に印刷界に一新紀元を画せりといふも過言にあらざるべし」（原文は旧漢字）。

それから85年を経て、情報学環所蔵の第一次大戦期のプロパガンダ・ポスター660点余を収めた本書が刊行された。その掲載作品の中には、『大戦』に登場していたものも少なくない。だが面白いことに、『大戦』の段階では、いかに「ポスター」を高い再現性のもと図版・図録化しえたかが誇られていたのに対し、本書では当時ポスターに用いられた印刷技術そのものがインテェンシヴな検討の対象とされ、「マテリ

アルとしてのポスター」がまず問題とされている。このような「戦争の表象に動員された技術の検証」は、メディアとテクノロジーの連関を考える上で不可欠な作業であろう。

また、こうした資料の公刊は、戦争の表象分析に大きく寄与するものである。たとえば、サム・キーナン著『敵の顔：憎悪と戦争の心理学』（柏書房、1994年）の訳者あとがきには、日本における「敵の顔の貧困さ」という佐藤卓己らの指摘がある。アメリカのポスターなどが、再三敵を“Hun”として描いたのに対し、第二次大戦などでの日本のプロパガンダは敵を鬼畜と呼びながらも、鬼畜として表象することに熱心であったとは言いがたい。『大戦』には、「日本のポスターは世界一の貧弱」（内田魯庵）という状況を克服し、実戦に備えるという問題意識が貫かれていたが、そこに集められたポスター群から日本のプロパガンディストたちは、何を学び、学ばなかったのか、またそれは何故なのだろうか。そうした問題を考える上でも、本書は貴重な資料となろう。

そして、外務省情報部収集のポスターが、本書にまとめられるに至る経緯にも興味がそそられた。かつて佐藤健二は、情報学環の前々身である新聞研究所の教授池内一氏旧蔵資料の来歴を辿りながら、戦争と流言研究、ないし軍と流言管理の関係を鮮やかに描いてみせた（佐藤健二『流言蜚語』有信堂、1995年）。『大戦』からは、収集に奔走した海外駐在の朝日新聞社員の姿がヴィヴィッドに伝わってくる。この660点余に関しても、85年以上の時間や機密の壁を、何とかブレイクスルーできないものだろうか。

難波功士



難波功士 (なんば こうじ)

1961年9月7日

[専攻領域] メディア史、広告論、文化社会学

[著書・論文]

『「撃ちてしまむ」：太平洋戦争と広告の技術者たち』講談社

『「広告」への社会学』世界思想社

『族の系譜学：ユース・サブカルチャーズの戦後史』青弓社

[所属] 関西学院大学社会学部

[所属学会] 日本マス・コミュニケーション学会、日本社会学会、日本ポピュラー音楽学会、日本広告学会